

新たなボランティア・セクター創造へのアプローチ ～ 救急箱が織り成す人間の絆 ～

調査研究部 川井 真

I. はじめに

濃密な人間関係が暮らしを支え合っていた伝統的なコミュニティは、産業革命を経た工業文明の発展過程でその存在感を失っていった。多くの日本人は、家庭という最小単位のコミュニティと、エンタープライズという——新しいコミュニティともいえる——組織の間を行き来しながら、都市という公共空間のなかで孤独な群衆に紛れるように日々の暮らしを送っている。昨今、人間関係の希薄化が原因と思われる社会問題が増加傾向にあり、メディアからも“絆”の再生を呼びかける声を耳にすることが多くなった。暮らしの場が“家庭”と“組織”に二分されたことで、この二つのコミュニティの成員以外の他者と、積極的な関係を求める必要がなくなったからだろう。

社会学の巨匠であるゲオルク・ジンメル (Simmel, G.: 1858. 3. 1～1918. 9. 26) が述べたように、都市生活者が互いに無関心を装うのは、精神的かつ社会的安寧のための保護行動であって、無関心であるがゆえに「人間は自由である」との考察もたしかに真理である。しかしながら、重化学工業社会が作り

出した都市化という現象を背景に、わが国は超少子高齢・人口減少社会を迎えようとしている。これまでの社会システムが機能不全を起こすことは、もはや疑いようのない事実であろう。経済機能と行政機能に暮らしのすべてを依存してきたリスクが、まさに顕在化しようとしているのである。それは「人はひとりでは生きてはいけない」ということを、あらためて日常に意識せざるを得なくなる時代の到来である。私たちの未来が豊かなものであるために、社会における人間と人間の関係を、いま一度、見直してみる必要があるのではないだろうか。

そこで本稿では、人間関係の再構築あるいは絆の再生を目的に開始された、先進的で大胆な試みについて報告する。具体的な事例紹介と併せて、主体的に活動を支える人々が有する、大らかで希望に満ちた人間観や社会観、そして彼らの語る未来についてもお伝えすることができればと思う。

概要としては、CSR活動の一環として製品化された「車載用救急箱」と、その救急箱に託された“絆”再生への願いが、いつしか当初の役割や目的を超えて多様化し、地域全体

の助け合い活動へと広がりを見せていく過程を追ったものである。救急箱が核となって新たな社会ネットワークが構成され、活動に参加する人々の意識の高まりが、互いの行動変容を促していく様子も垣間見ることができる。それは地域社会という空間に、ともに学び、ともに気づき、ともに成長していく“場”が創造されていく過程として捉えることもできるのかもしれない。

II. 救急箱に託された願い

本件の活動の核となる救急箱は、株式会社エルプエンテ・インターナショナル代表取締役の藤原公生氏と、ピップトウキョウ株式会社・営業開発部の高橋正行氏の出会いから生まれた。心理カウンセラーとしての経験を有する藤原氏は、現代における社会問題の多くは、人間同士の関係性の希薄化や信頼の欠如によって引き起こされているという、確信的な危機意識を持っており、人間と人間の間を再構築するための方法を模索していた。一方、ピップトウキョウの高橋氏は、衛生医療用品を扱う企業に勤務する者として、自社のノウハウや製品を社会貢献活動に活かすためのプランを模索し、プライベートな時間も削りながら思案に暮れていた。

ある日、藤原氏の脳裏に、『他者に提供するために購入する車載用救急箱』を社会に普及することができないか、という発想が浮かぶ。藤原氏は、自身の発想に対する感想と製品化の可能性について、以前から交流のあった高橋氏に相談を持ちかけるが、偶然にも相談相

手が類似の課題を抱える高橋氏であったことから、話は急展開を見せることになった。

意義と目的を共有した二人は、ピップトウキョウ株式会社の理解と協力の下で製品化に向けた議論を開始する。専門家の指示を仰ぎ、試行錯誤を繰り返して完成した救急箱（写真1）は、一見すると何の変哲もない単なる救急箱だが、中には人間と人間の絆の再生への願いが込められていた。必要とする誰かのために、自らが購入し車載する救急箱という発想は、利己主義と物質的価値観に支配された現代社会では無謀とも思える企画である。しかしながら、「他者の顔の見える社会であって欲しい」という素朴な願いの先には、人間と社会への信頼と期待が込められているようにも思える。そして何よりも、社員の自発的な活動と社会貢献意識を評価し、その思いを受け止めて後方支援に動いたピップトウキョウ株式会社の柔軟な姿勢には、大らかな社風や経営哲学が映し出されており、そこには、これからの企業のあるべき姿が示されているように思えてならない。

（写真1）救急箱の内容



Ⅲ. CSRから地域の助け合い活動へ～救急箱が織り成す人間の絆

絆の再生を託された救急箱は、藤原氏と高橋氏の精力的な普及活動によって徐々に賛同者を増やしていく。やがて救急箱は二人の思いを越えた柔軟な広がりを見せ始め、それはコミュニケーション・ツールとしての役割を果たしながら、人間同士の意識を統合する触媒となっていった。企業の社会貢献活動から始まった取り組みが、地域の助け合い活動へと発展していく過程を追った。

1. 救急箱の製品化を主導したピップトウキョウ株式会社では、社会貢献活動として全営業車両に救急箱を搭載し、車両には車載表示のステッカーを張っている（写真2）。総務課長の菅原幸一氏は、「営業車にステッカーが張られたことで、社員一人ひとりの社会に対する認識も変化してきたのか、社会的責任の自覚や社会貢献活動への関心の高まりを感じる。」と語る。さらに、「負傷者に提供する救急箱を積んでいる車が、事故を起こすわけにはいかないよね。」という従業員同士の何気ない会話のなかに、安全運転への意識と社会人としての責任の自覚を感じ取り、その意識変容を高く評価している。

2. 藤原氏の思いに賛同し、自主的に活動を始めたのは、太陽生命保険株式会社 横浜支社のボランティアグループである。彼女たちは徒歩で営業活動を行っているため、救急箱はバッグに携帯している。胸のバッジは救急箱を携帯していることの証である

（写真3）。支部長の箭中美智子氏によると、この活動を契機に救命救急活動への参加意識も高まり、消防署に依頼して、社内で「AED」（自動体外式除細動器）の講習会も開催したという。その一連の活動は社内報にも紹介され、結果、横浜支社全体の社会貢献意識の向上にも少なからず貢献することになった。救急箱に託された目的を変えることなく、豊かな発想と広がりを持たせたいという新たな活動により、救急箱には新しい彩が添えられた。活動に対する社会的評価はグループの営業成績に反映され、業務と社会貢献活動のシナジー効果が徐々に表れ始めている。

（写真2）ピップトウキョウ営業車両



（写真3）太陽生命保険 横浜支社の皆様



(写真4) 地域活動を支える人々



左から WFP 田邊邦典氏
 ピップトウキョウ 高橋正行氏
 麦田町発展会 大谷稔氏、加賀谷徹氏
 太陽生命保険 箭中美智子氏
 エルプエンテ 藤原公生氏

3. 横浜市中区に位置する麦田町商店街は、地域で生まれ地域に育てられてきた商店街である。暮らしに密着し、住民とのふれあいを大切にする麦田町商店街も、地域住民への恩返しをの気持ちで救急箱の導入を決めた。同商店街で焼肉店を営む加賀谷徹氏の熱い思いと行動力が、麦田町発展会会長の大谷稔氏の気持ちを動かしたのだ。大谷氏は「若い人は自分たちの世代では思いもつかない、しなやかな発想力を持っている。これからも若い人の意見を積極的に取り入れていきたい。」と語る。麦田町商店街に救急箱が設置されてまもなく、大谷氏の店の前で接触事故が発生したらしい。「以前なら傍観者の一人だったが、気がついたら救急箱をもって現場に向かっていたよ。」と照れくさそうに語る大谷氏の笑顔が印象的であった。いま、商店街に新しい風が吹き始めている (写真4)。

(写真5) 横浜ベイスターズ球団事務所にて



左から 横浜ベイスターズ 佐藤貞二氏
 エルプエンテ 藤原公生氏

4. 株式会社 横浜ベイスターズは、CSRの推進を目的とした内部利用のほかに、チャリティ・イベントの参加者への提供も視野に入れて救急箱を導入した。内部には救急箱に託された本来の目的を説明したうえで配付を行ったが、使途に関する強制はせず、職員が自主的に利用できるような柔軟な取り扱いをしている。またチャリティ用は、主に横浜ベイスターズ主催のイベントに参加してくれた少年野球チームの皆様に配付しているとのことである。常務取締役の佐藤貞二氏は、「この救急箱の活動を支えている人々の間に、何か“暖かいもの”を感じたからかな…」と導入した動機を語っている。自分のためではなく、誰かの役に立ちたいから備える。現代社会に失われつつある利他の精神に、少なからず共感できる場所もあったという。地域に支えられながら、地域に夢と希望を提供する、プロ球団らしい謙虚で寛容な姿勢が映し出されている。(写真5)

IV. 新たなボランティア・セクターの創造 ～さらなる広がり求めて

絆再生への願いを詰め込んだ救急箱は、当初の「車載用」という概念にとらわれることなく、手にした者の自由な発想と活動目的によって様々な彩が添えられていた。救急箱が創り出す社会ネットワークに映し出されていたのは、活動に参加することで変化していく人々の意識である。それは社会の構成員としての当事者意識の高まりを意味しているのかもしれないが、取材に協力していただいた全体的な人々の言葉に、豊かな未来への希望のようなものを感じ取ることができた。救急箱に託された願いは、緩やかに、しかし確かに、人間と人間を結びつける役割を果たし始めているように思えた。

また、救急箱を核とする活動はさらなる発展を遂げようとしている。救急箱の売り上げの一部は、WFP国連世界食糧計画に寄付される予定である。現時点では地道な草の根活動を積み重ねていくしかないが、未来に新たなボランティア・セクターとしての地位を確立する可能性がないわけではないだろう。もし実現できれば、国際的な社会貢献活動を支える好循環のキャッシュフローが完成することになる。WFP専務理事の田邊邦典氏も期待をこめて活動を見守っている(写真4)。現代の価値観に照らせば理想論としての域を出ないのかもしれないが、未来がその胸中にあれば、社会は大きく舵をきるかもしれない。いま緩やかに、パラダイム・シフトは始まっている。

V. 結びに代えて～モダニティとアイデンティティ

私たちは経済的自立と自由に支えられ、多くのしがらみや規制からも解放されたが、一方で—技術革新や環境変化なども少なからず影響して—社会における『公共性』の喪失という現実も受け入れることになった。現代の社会構造に埋め込まれたモラルや秩序は、数年あるいは数十年という時間的経過を経て形成されてきたものであるが、近年、公共空間に出現した—パターン化され安定化した—新しいコミュニケーション行為により、人間と人間の関係性も変容したと見ることが出来る。当然そこには新たな秩序も生み出される。過去、アメリカの社会学者アーヴィング・ゴッフマン (Goffman, E.: 1922. 6. 11~1982. 11. 19) は『儀礼的無関心』という有名な言葉を残している。人間同士の精神的空間には「密接距離」・「個体距離」・「社会距離」・「公共距離」という4つの距離感覚が内在され、なかでも密接距離は親子や恋人同士のような極めて親密な関係にある者同士が共有する距離と定義されている。しかしながら、都市の公共空間では、たとえば電車やバス、あるいはエレベーターの中など、好むと好まざるとにかかわらず、互いの親密空間に立ち入らざるを得ない状況が日常的に繰り返されているのである。このような場面で都市生活者が取る行動をゴッフマンは儀礼的無関心と呼んだ。我々は、あたかも他者の存在に気付いていないような素振りをして、互いに

目を合わすこともなく、必要以上に相手の行動を観察したりもしない。これが都市におけるコミュニケーション・マナーとなったわけだが、自由であるがゆえに、過度の利己主義と個人主義を生み出す温床になってしまったことも否めない事実であろう。工業文明は全国的な人口の流動を作り出し、いまや地方の中心市街地も都市化が進んでいる。コンパクト・シティも近い将来には具現化の方向へと向かう可能性があり、古き良き地縁社会への憧れに囚われて、都市生活における人間関係の希薄化を悲観しているだけでは、私たちは前進できない。

上述したジンメルも「社会とは人間と人間の間を行き交う無数の糸である」という表現を用いている。ジンメルがいうように、社会に実体などなく、それが「人間と人間の関係が作り出す空間」であるとするならば、都市における「弱い関係性」や「弱く存在する自由」を尊重しながら、新しい社会を構想していくことが私たちに課せられた使命なのではないだろうか。絶えず人間が流動する現代社会という空間において、真に安全で安心な環境を望むならば、人間と人間が織り成す信頼のネットワークを構築する以外に、それを実現することは困難であろう。古くはアレクシス・ド・トクヴィル(Tocqueville, A. de 1805. 7. 29~1859. 4. 16)が立論した「アメリカの民主政治」に映し出される市民社会の姿や、あるいはロバート・パットナム(Putnam, R. D. 1940. 1. 9~)が著書「孤独なボーリン

グ」のなかにリアルに描写した、社会的ネットワークの脆弱化が作り出す孤立などからも推察できるように、社会関係資本(Social capital)を具現化する要素が“互酬性と信頼性を兼ね備えた社会的ネットワークの形成”にあるとするならば、本稿で紹介した活動事例に登場する人々が抱く願いと行動の先に、それを実現するヒントがあるのかもしれない。また、NPO研究者として著名なレスター・サラモン(Salamon, L. M.)は、NPOの組織論的課題を“ボランティア・セクターの失敗”という概念提起によって示しているが、その主たる要因は、活動を持続可能にするための全般的な資源あるいは資金の不足である。そのことから、慈恵的な目的を持つ救急箱に経済的価値を与え、意識が増殖され、活動が拡大していく過程でキャッシュフローが生み出される仕組みは、ボランティアの失敗を克服する可能性も秘めていると断言しているのかもしれない。物質と経済的価値だけが人間の行動を支配していた社会から、真に豊かな社会への移行は、このような日常の些細な心くばりから生まれ、理想を共有し合える関係の増幅と地道な活動の積み重ねから始まるのではないだろうか。